

## 2章 ジェンダー視角から見る大学生余暇生活の過ごし方 ——同志社大学社会学部卒業生を事例に——

### 1. 問題意識と目的

社会進出を控えた大学生にとって、大学生活は人生の中で最も重要であり、充実すべき準備時期だと言える。大学生活からさまざまな体験や有意義な日々を求める大学生たちが、希望を持って大学に進学している。学校での講義・実験・実習指導を受け、そして、社会でやってみたい仕事に就き、技術者として研究者として活躍するのが多く大学生の目的である。

生活の質や精神的生活の充実が重要視されるようになってくるにつれて、生活の質を向上させる要件としての余暇生活が注目されるようになってきている（小島 1994）。大学生も同じように、彼らにとって、勉学はもちろん、何事にも積極的に未来志向で取り組みたいし、いろいろな居場所を求めながら、充実した大学生活を過ごしたいと考えている。授業や研究を通じて大学生に知識・技能を身につけさせることはできるが、社会進出に対して、それだけの準備では不十分であり、社会的なコミュニケーション能力や情報獲得も必要となり、それがひいては将来のキャリアにも繋がっている。大学生の充実感は、学業だけではなく、余暇生活を豊かにし、学習以外の活動を行い、学内外の友人関係に対する満足感によっても規定されるだろう。さらに、余暇生活の中で学内外の友人関係に満足するほど、学業意欲も強くなり、全体的な生活の充実度も高まり、就職活動が成功しやすくなるかもしれない。

本稿では、学習以外に加えて、サークル・同好会などの活動、アルバイトの経験、学内外の友人との交流、広く大学余暇生活の過ごし方を尋ね、大学生たちが、余暇時間を利用してどう過ごしているのかを明らかにする。その上で、性別がそれに影響するという解釈の可能性を示唆したい。

### 2. 分析手順

分析には、同志社大学社会学部教育 GP 評価委員会が行った第 2 回社会学部卒業生アンケートのデータを用いる。2010 年 3 月社会学部の卒業生から、回収率 86%である 376 名の回答を得たものを分析する。

まず、「大学で受けた教育全般の満足感」について、男女大学生の満足度がどの程度かを見る。そして、全般的な大学生活への充実度の分析も行い、大学生たちが学生生活にどの程度充実感をもったかを検討する。その上で、大学生の余暇生活において、「学習以外の活動を行う状況」「アルバイトの経験」「学内外の友人関係」に関連する項目を用い、各変数の分布などの基礎統計を確認しておく。そして、各変数において、性別による偏りが存在

すると予測し、クロス集計からは性別の影響も読み取る。なお本報告では、クロス集計の検定結果を中心に提示する。クロス集計によって明らかになった結果については、適宜、図表と文章説明で補う。

### 3. 大学生活における学びと充実

大学生活において、授業・授業外の学習をバランスよくおこなう学生が自らの成長を実感している。大学生たちは、学校で受ける教育に満足し、学習以外の生活から社会的な経験をたくわえて、立派な社会人になるように準備している。ここで、社会学部卒業生たちが、大学で受けた教育に対する満足感や全般的な大学生活から得る充実感をみる。

#### 3.1 大学で受けた教育の満足感

表1 性別から見る教育の満足

	満足		どちらかといえば満足		どちらともいえない		どちらかといえば不満		不満		合計
	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	
男性	36	23.8	68	45.0	37	24.5	9	6.0	1	0.7	151
女性	53	25.2	113	53.8	33	15.7	11	5.2	0	0.0	210
合計	89	24.7	181	50.1	70	19.4	20	5.5	1	0.3	361

大学の教育は自分の将来に役に立つと思う者ほど、満足感が高いと思うだろう。ここで見る、男女別の満足感について、「満足」や「どちらかといえば満足」をあわせた割合は、女性が79%で男性の68.8%より10.2%高かった。それは、女子大学生はもっと教育を重要視し、真面目に講義に参加していると考えられる。

もちろん、学問や専門知識を求めるのは、現在の大学生が入学した主な目的である。しかし、単調な大学生活に大学生たちが満足できないという傾向もよく見られ、大学生活への充実感を高める要因として、学習以外のことが多く考えられている。

#### 3.2 大学生生活に対する充実感

表2 性別から見る大学生活への充実度

	充実していた		どちらかといえば充実していた		どちらともいえない		どちらかといえば充実していなかった		充実していなかった		合計
	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	
男性	94	61.8	48	31.6	4	2.6	2	1.3	4	2.6	152
女性	145	72.1	45	22.4	8	4.0	2	1.0	1	0.5	201
合計	239	67.7	93	26.3	12	3.4	4	1.1	5	1.4	353

大学生活に対する全般的な「充実していた」と回答しているのは67.7%、「どちらかと

「いえば充実していた」の回答率は26.3%で、全体の94%の卒業生は学生生活が充実していたとみられる。それは、学業などで日々努力した結果生まれる満足感からおこる充実度と考えられる。また、男女別から見る充実度において、「充実していた」と「どちらといえば充実していた」をあわせた割合は、男子学生は93.4%で女子学生の94.5%より少し低かった。しかし、「充実していた」という肯定的な回答結果は女子が72.1%で男子の61.8%より10.3%が高かった。ここでは、女子大学生は男子大学生よりやや高い充実度がでたということで、女性の方が大学教育や交友関係などの大学生活の全般に適応しやすく、充実度を高めていると言える。そして、充実度が高いという結果は学習以外の学生生活も大きく影響していると推定できる。

#### 4. 男女大学生の余暇生活について

大学生たちが、4年間の大学生活における満足感・充実感を得るために、余暇生活にも期待し、積極的・意欲的に取り組もうという向上心がみられる。同志社大学社会学部の大学生たちが、どのような活動を行い、どのような余暇を過ごしているのかについて、ここで分析してみよう。

まず、男女大学生の通学状態をみる。

表3 性別にみる通学状態

		自宅	下宿	合計
男性	度数	72	79	151
	%	47.7	52.3	100.0
女性	度数	121	84	205
	%	59.0	41.0	100.0
合計	度数	193	163	356
	%	54.0	46.0	100.0

表3から、女子大学生は男子大学生より自宅から大学に通う者が多い。自宅の場合は家族に頼り、中学校・高校時代の古い友人もたくさんいると考えられる。ところが、下宿の場合は、家族や古い友人から離れ、楽しみを大学生活に期待し、交友したい希望が自宅生の場合より強く、学習以外の活動にも積極的に参加すると予測できる。

#### 4.1 在学中に学習以外の活動を行う状況

表4 在学中に学習以外の活動を行う頻度

	よくした		ときどきした		あまりしなかった		しなかった		合計	
	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%
体育会・部活	59	16.6	16	4.5	21	5.9	259	73.0	355	100.0
サークル・同好会	128	36.1	77	21.7	48	13.5	102	28.7	355	100.0
小説を読む	92	25.6	145	40.3	94	26.1	29	8.1	360	100.0
ビジネス誌・経済誌を読む	28	7.8	110	30.6	138	38.4	83	23.1	360	100.0
政治討論番組をみる	36	10.1	112	31.4	125	35.0	84	23.5	357	100.0
美術館や博物館へいく	60	16.7	142	39.4	93	25.8	65	18.1	360	100.0
海外旅行へいく	87	24.2	118	32.8	68	18.9	87	24.2	360	100.0
スポーツをする	114	32.0	106	29.8	102	28.7	34	9.6	356	100.0
ボランティア活動	73	20.3	60	16.7	86	24.0	140	39.0	359	100.0
インターンシップ	23	6.4	38	10.6	56	15.6	243	67.4	360	100.0

表4の結果から、最も参加する活動として「サークル・同好会」をよくしたのが128人、全体的な回答者の36.1%であった。ときどきした人数とあわせて、355人の回答者の中で205人57.8%だとなっている。その次に、「スポーツをする」について、よくしたのが114人とときどきした106人で61.8%という高い割合がでた。

サークル・同好会に参加する動機として、学内の友人関係に満足したいというのが主な要因だと考えられる（見館ほか2008）。また、山田ほか（1980）は、九州大学の卒業生に対して「大学生活の満足度とその理由」を分析した結果、大学生活で重要なことは「学業」もさることながら「友人・先輩・後輩のふれあい」が大きな要素を占めると示唆している。

その上で、興味を持つものに多少性別によって異なる活動の種類もあると考える。さらに、学習以外の活動について、男女別によって何が違うか、それぞれの項目において分布をみる。

図1 男女別にみる体育会・部活の参加

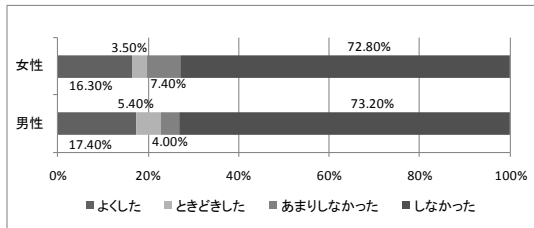


図2 男女別にみるサークル・同好会の参加

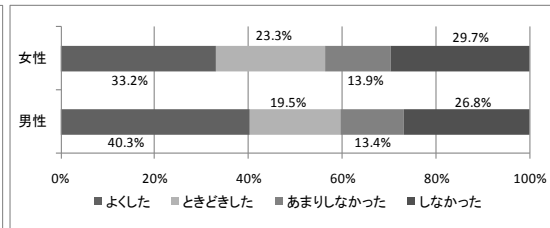


図3 男女別にみる小説を読む

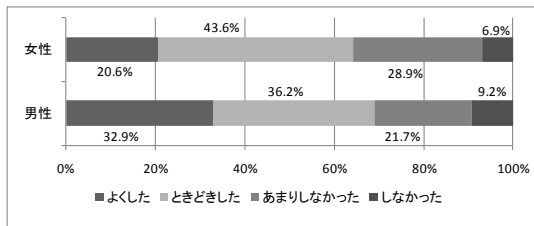


図4 男女別にみるビジネス誌・経済誌を読む

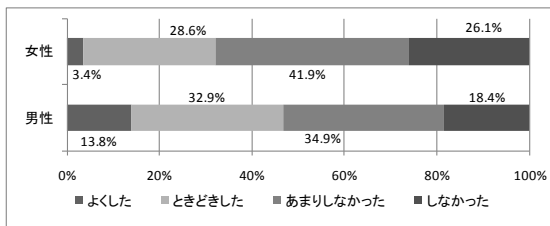


図 5 男女別にみる政治討論番組を見る

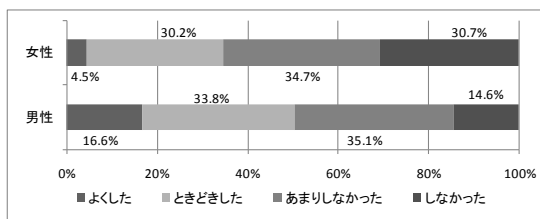


図 6 男女別にみる美術館や博物館へ行く

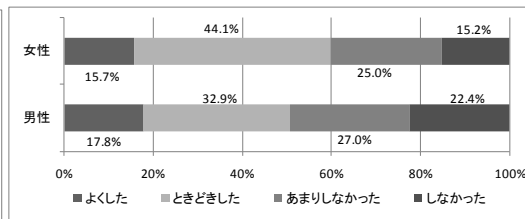


図 7 男女別にみる海外旅行へ行く

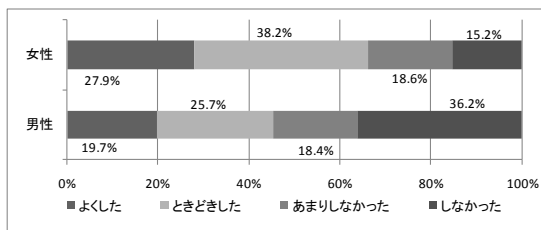


図 8 男女別にみるスポーツをする

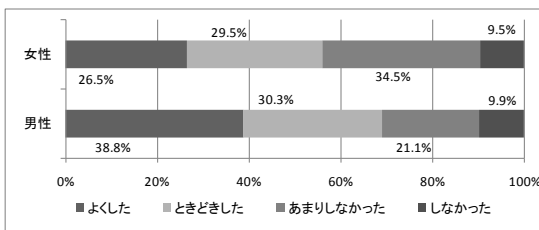


図 9 男女別にみるボランティア活動の参加

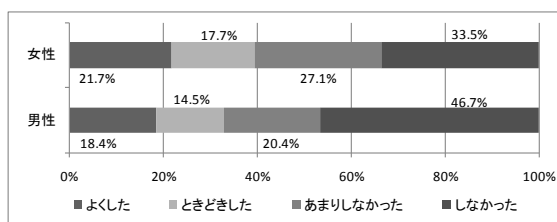


図 10 男女別にみるインターンシップの参加

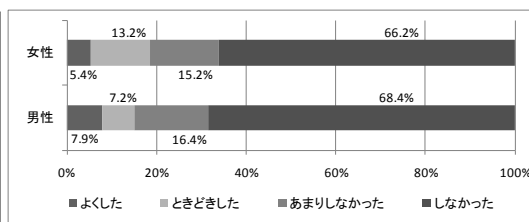


図 1 からわかるのは、男子大学生の「体育会・部活」への参加は女子よりやや高い。同じように、図 8 の「スポーツをする」割合も男子大学生のほうが高かった。それは、心理的・性格的や身体的な要因で、男子大学生はスポーツへの行動意図が女子より強く、女子大学生はもっと文化・芸術的な集まりを好むからだろう。しかし、「サークル・同好会」の参加結果をみてみると、男女の差はあまりみえないものの、男子大学生の参加割合は少し高かったことを示している。そして、「ビジネス誌・経済誌を読む」と「政治討論番組をみる」の場合では、男子大学生のほうが興味を持つようである。「小説を読む」という項目についても、女性の割合が高いと予測されがちだが、同志社大学社会学部の卒業生の場合では、男子大学生の割合が少し高くなっている。女子大学生は、やはり「美術館や博物館に行く」、そして、「海外旅行」や「ボランティア活動」に参加するのに積極的だと見られている。「インターンシップ」に参加する男女大学生は少なく、まったくしていなかった学生の割合も高かった<sup>1)</sup>。

1) 同志社大学社会学部教育 GP 評価委員会が行った第 1 回社会学部卒業生アンケートのデータ分析では、インターンシップにまったく参加していなかった割合は全員の 77.7%であった。そして、インターンシップの経験は就職において、効果的ではないと明らかになった。

また、学習以外の大学生生活の過ごし方には、学内でおこなうクラブやサークル活動の他にも、学外でのアルバイト、友達との交際、読書などが含まれる。

たとえば、アルバイトの経験を持ち、授業内外での「つきあい」により豊かな者は、大学生生活および、余暇生活に満足感を得、楽しい大学生生活を過ごしていこう。これらは、授業に直接関連のない活動が授業での学習や技能獲得にも影響を及ぼしていることを示している。したがって、授業でなされることだけで学生は知識や技能を獲得しているわけではない、豊かな学生余暇生活から、多くの社会的な知識や情報を手に入れるという可能性が示唆されている。

#### 4.2 アルバイトの経験について

表 5 性別からみるアルバイトの経験期間

	アルバイトの期間										合計
	していなかった		1年より短い		1年～2年		2年～3年		3年以上		
	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%	
男性	9	6.0	15	9.9	23	15.2	26	17.2	78	51.7	151
女性	5	2.4	14	6.8	25	12.1	41	20.0	121	58.7	206
合計	14	3.9	29	8.1	48	13.4	67	18.8	199	55.7	357

表 5 の結果により、「2～3年」、「3年以上」アルバイトしている女子大学生は男子大学生より多くいる。しかし、「していなかった」「1年より短い」「1年～2年」の場合は、男子大学生が女子より多い。4年間の大学生活の中で、女子大学生たちが男子大学生より同じところで長くアルバイトをしていたと考えられる。

資格の取得や勉強を主な余暇生活に含めている場合に充実感が高く、アルバイトに多くの余暇時間を費す場合に充実度が低いことをある研究（佐々木ほか 1980）が示していた。すなわち、アルバイトをやっている職場には必ずしも満足していないと考えられる。しかし、余暇生活において、大学生たちが楽しもうとしてアルバイトという職場にいて、人間関係や社会的な経験を得られることは想像に難くないだろう。したがって、アルバイトに余暇時間を費す場合に充実度が高まる可能性も存在している。

#### 5. 相談ネットワークから見る卒業生の付き合い

大学生たちにとって、生活の中で不安に感じることについて、相談したり、助けになってくれる相手が必要だろう。

表 6 相談ネットワークにおける相談相手の度数分布

相談相手	いる		いない		合計	
	度数(N)	%	度数(N)	%	度数(N)	%
本学の同じ学科に在籍する同級生	334	92.0	29	8.0	363	100.0
本学の同じ学科の先輩・後輩	169	46.7	193	53.3	362	100.0
本学の他学科・他学部 <sup>1)</sup> に在籍している人	306	85.0	54	15.0	360	100.0
ちがう学校に通っている人	315	87.5	45	12.5	360	100.0
正社員や正規職員として働いている人	214	59.6	145	40.4	361	100.0
フリーター(パート・アルバイトで生計をたてている人)	171	47.4	190	52.6	361	100.0

社会学部卒業生全体の分析結果から、「本学の同じ学科に在籍する同級生」の付き合いがあると回答したのは 334 人で 92% の圧倒的に高い割合を示した。それは、同じ学科に在籍する同級生と同じ講義に参加し、平日に学校に通う間にほとんどの時間を一緒に過ごし、良好な友人関係を育成していくからだろう。

「本学の同じ学科の先輩・後輩」の付き合いがあると回答している学生は 362 人の中で 169 人であり、46.7% を占め、最も低い割合を示している。ここにおいて、先輩と後輩の付き合いは気遣う関係になりやすく、もっと落ち着く友人関係を求める大学生が多くいると考えられる。けれども、学習に関する情報や経験を得るため、先輩と付き合うのが必要だと考えている大学生も少なくないだろう。

次に、「ちがう学校に通っている人」「本学の他学科・他学部<sup>1)</sup>に在籍している人」の結果を見てみると、全体的な卒業生の 87.5%、85% という比較的高い割合を示している。それは、サークル・同好会・部活などの場でコミュニケーションを介して、学内における友人ネットワークを広げている結果と思われる。また、「正社員や正規社員として働いている人」「フリーター(パート・アルバイトで生計をたてている人)」の付き合いがある割合は、59.6% ; 47.4% となっている。

ここで、また、性別において、学内外の付き合いがあるかどうかと男女大学生の回答差をみてみよう。

図 11 同じ学科に在籍する同級生

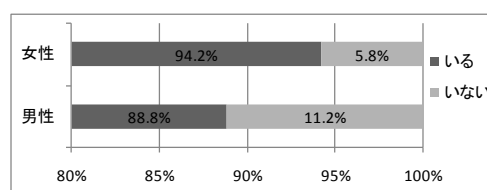


図 12 同じ学科の先輩・後輩

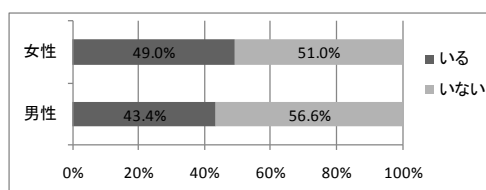


図 13 他学科・他学部の人

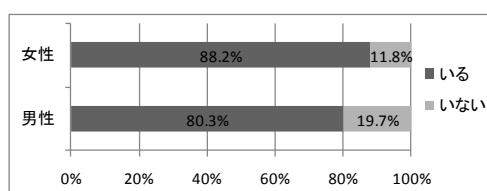


図 14 ちがう学校に通っている人

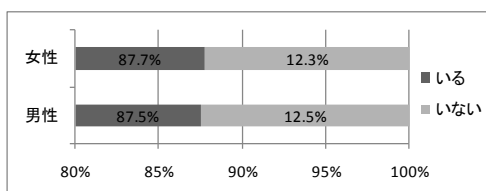


図 15 正社員や正規職員

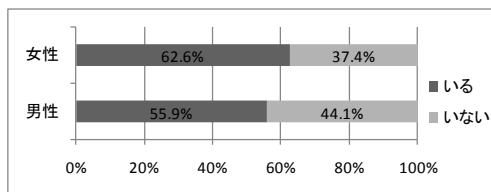


図 16 フリーター

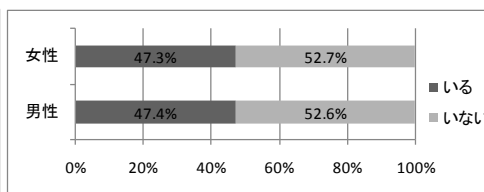


図 11 をみると、男性より女性は同じ学科の同級生とよく付き合っている。また、他の項目に関しては、男女差があまり見えないが、男子大学生より女子大学生の方は付き合いが全体的にやや多くみられている。それは、男女の性格の違いによる対人する態度が異なるからと解釈できる。特に、青年期の友人関係に対する研究（西迫ほか 2005）の中で、男子学生と女子学生は同じように大学での勉強に不安を感じやすく、友人関係が必要だとなっている。高井（2008）は、女子学生より男子大学生が人間関係の拡大深化への希求が多く、人間関係を積極的に広げたいものの、女子より対人スキル不足やコミュニケーションスキル不足であると述べている。したがって、同志社大学社会学部大学生の場合をみれば、男子より女子は付き合いが多く持つことをわかった。

これらの結果から、社会学部卒業生の学内外ネットワークは多様性であり、幅が広がっているとと言える。自己充実にするためや将来の進路だと考える際に、学校内や学校以外の付き合いも必要だとなっている。このように、自我同一性を形成や確立していく過程に、余暇時間をよく利用して、学習・サークル/同好会などの参加・学内外ネットワークといった学生生活に関連している要因から、大学生生活充実度に影響している。

## 6. まとめ

現在の大学生たちは、豊かな学生生活を送りたいという傾向が強い。一般的に、大学生生活の充実感に直接関係をもつ重要な要因だと考えられるのは、大学で受ける教育と学習以外の余暇生活の満足感だと考えられる。本報告では、ジェンダーの視角から大学生の余暇生活をどう暮らしているのかについて検討してきた。

本分析の結果より、まず、教育への満足感において、もともと全体的に高い状態にあるが、男子大学生より女子のほうがやや高い。大学生生活への充実度では、男女間において有意で顕著な差は見られず、全体的に高い充実度を得ている。

学習以外の余暇時間の利用においては、サークル・同好会など学内の活動に参加し、読書やマスコミ情報への関心をもち、海外旅行・ボランティアなどの社会的な行動をおこなっている。これらの結果は、男性と女性では異なる傾向が存在することを示唆している。たとえば、スポーツへの関心は男女とも高いが、学内での体育会・部活、そして普段にスポーツをする大学生の割合は、やはり男子大学生が高い傾向にある。もちろん、文化系の行動については、いわゆる美術館・博物館に行ったり、海外旅行、ボランティアをよくお



こなうのは女子大学生であった。しかし、サークル・同好会への参加や読書、そして、政治・経済への関心を持つのは、男性のほうがやや高い結果にあったため、女子大学生より男子の方が、社会への関心をもち、学内活動へ積極的に参加していると言えるだろう。

ところが、生活の中で、自由に使うお金も必要となるので、将来のキャリアを考える際、もっと社会的な経験や学外からの情報獲得も非常に重要となってくる。余暇時間を利用してアルバイトに通うのも大学生の余暇生活の一部となっているが、結果的には、男性より女性の場合は、日常生活への要求が多いため、持続的にアルバイトをしている。

また、学内外ネットワークを介して得られる友人関係が非常に重要視され、ほとんどの学生が人間関係を要望する。同じ学科の同級生の友人数は女子大学生に際だって多くなっており、それ以外の付き合いに対して、男女差が小さかった。したがって、女子大学生は対人関係がうまくいき、友人を持つ数は男子大学生より多いと考えられる。さまざまに形成される友人関係やグループの生活を通して、社交、遊び、スポーツ、趣味などの余暇生活が展開し、あるいは読書、テレビの視聴、創造的な活動がおこなわれていた。

以上のことより、大学生たちが余暇生活を豊かにし、それから得る満足感に応じて、一般的な大学生生活の充実度が高まり、社会進出への影響を受ける。こうした大学生の余暇生活がこれまで以上に重視される状況にあって、個々の集計分析から、性別による余暇生活の暮らしかたが違っていることにもっと注目してもいいのではないだろうか。

## [参考文献]

- 小島秀夫,1994,「日本人の余暇生活と価値志向」『茨城大学生涯学習教育研究センター報告』  
1,7-29
- 佐々木薫,辻村徳治,1980,「学生生活の充実感に関する研究：第1回カレッジ・コミュニティ調査資料の再分析」『総研論集』関西学院大学 3,1-27
- 高井範子,2008,「青年期における人間関係の悩みに関する研究」『太成学院大学紀要』  
10,85-95
- 西迫貴美代,坂上ちえ子,2005,「鹿児島における若年層の生活文化調査(第3報):大学生の生活状況と文化に関する意識と実態調査のクロス集計結果」『鹿児島県立短期大学研究年報』 36,101-151
- 見館好隆,永井正洋,北澤武,上野淳,2008「大学生の学習意欲,大学生生活の満足度を規定する要因について」『日本教育工学会論文誌』 32(2),189-196
- 山田裕章,冷川昭子,峰松修,1980「学生生活の研究：卒業後から見た大学生生活の満足度」『健康科学』 2:155-161

(2章担当：巴芳、教育G Pアカデミックアドバイザー、博士後期課程)